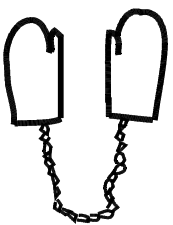


解答

- 一 問一 急いでいるのに、ほとんどなんの情報も含まれていないやりとりをするのは時間のむだだと思えたから。
 問二 A 相手から役
 B 互いが同じ場所と時間を共有していることをたしかめあうこと
 問三 じたばたしたところでどうにもならない現実にたいする深い諦念を抱いているから。
 問四 死が日常で、生きることが困難なきびしい現実のなかにあっては、お互いに生きて相まみえたこと自体が幸運なことだから。
 問五 いつものとおり

- 二 問一 A 模様 B 単純 C 観光客 D 厚〔み〕
 E 童話 F 失敗 G 宣言 H 得意 I 口調

問二



- 問三 筆者の性格を心得た母の心配りを改めてなつかしむ気持ち。
 問四 客の手に合うサイズの手袋を店主に判断してもらったため。
 問五 キツネの手
 問六 この中からあなたの好きな手袋を選びなさい。
 問七 何十年も客の手ばかり見てきた店主のゆるぎない自信。

- 三 問一 大きな地震にあいながらも、現実とは思えないようす。
 問二 地震で揺れて自分の体が大きく上下した。
 問三 エ
 問四 イ
 問五 オ

- 問六 A 子どもが口にした言葉 B 時間の経過を表す言葉

解説

一 出典は、田中真知「おまえはやって来た」『美しいをさがす旅にでよう』所収。

問一 「質問をしてもストリートな答えが返ってくることはめったになく、ピ塔のずれたやりとりをつづけたあげく、結局、知りたいことはわからない」とあるから、筆者は、何か知りたいことがあるので、それ(Ⅱ情報)を待って「長いあいさつ」もがまんしているのですが、「結局、知りたいことはわからない」。「急いでいるのに」「こういうことが重なれば、「なんの情報も含まれていないやりとり」の「長いあいさつは、かえって面倒」で、「苦痛」で、「時間むだになる」と思うようになります。

問二 A 筆者の考える「情報の交換」は、次の段落に「具体的な情報のやりとりとは、いわば互いを利用し合うことである。相手から役に立つ情報を引き出し、その対価として相手が必要とする自分の情報をさします。それは等価交換、いわゆるギブ・アンド・テイクである。」と説明されています。設問にある「内容をくわしく述べている一文」となれば、二つめの「相手から」で始まる文ということになります。B さらに続く段落が「けれども、『あいさつ』はそうではない」という言い方で始まりますから、「あいさつの意味はどういうところにある」かという問いの答えは、この段落にあるはずです。文中で筆者は次のように述べています。つまり「長いあいさつを聞いていて感じたのは、情報のやりとりよりも、互いが同じ場所と時間を共有していることをたしかめあうことのほうが、だいたいじらしいという思いだった」と。

問三 「彼らの死に対する態度」が「ドライ」だと筆者に思えたのは、仲が良さそうに見えていた「相棒」の死に対して「興味なさそう」で「無関心な態度」に見えたからです。「しかし、それは彼らが薄情なのではなく、じたばたし

たところでどうにもならない現実（死が日常）にたいする深い諦念が、死に対してドライな態度をとらせるようになったのかもしれない」ということに思いがたります。ドライに見えるのは、人が簡単に死ぬというこの現実はいじられたところでもどうにもならないという深い諦念を彼らが抱いているからなのです。

問4 前問で見たように“現実”は「じたばたしたところでもどうにもならないのです。自分たちの日常が死と隣り合わせであることを彼らは知っています。そういうなかであって、互いが元気で会えたことがどれほど奇跡的なことなのか、と祝福しないではいられません。死が日常で、生きることが困難なきびしいアフリカの現実のなかにあつては、お互いの暮らしぶりが変わらずに生きて相まみえたこと自体が幸運なことなのですから。

問5 「ウシが盗まれるのも【】だし、…の部分」が、文章の初めのほうにあった「いつものとおりか。変わりはないのだな」／「変わりはない。××族のやつらはウシを盗みにやって来るし、△△のところにはまた子どもが生まれ、怠け者の○○は女房に尻を叩かれてる…」／「そうか、いつものとおりか」／「ああ、いつものとおりだ」に対応していることに気がつけば答えは明らかでしょう。

二

問2 手袋の形状は、「右手と左手が紐状の鎖編みでつながっていた」と「親指とその他の指、二つにしか分かれていないタンジユンな形」とから、だれでもほぼ間違いない図にかけられるでしょう。

問3 そういう「おっちょこちょいの私」の性格を知りつくしたうえで、左右の手袋を紐でつないだ「手編みのミトン」を与えた母の心配りを、筆者はなつかしく思っているのです。

問4 この後の成り行きを読めば、何のために「クツシヨンの上に手を載せる」のかが分かります。「クツシヨンの上の手を見下ろしていた店主が」「エイト」と「センゲン」して、「棚の一段から二十種類くらいの手袋を取り出し、カウンターの上にごさつと置いた」とありますから、目的は、客の手に合う手袋のサイズを店主が判断するためだったのです。

問5 「人間に変えてもら」った方の手ではなく、「子ギツネはキツネの手を差し出してしま」いました。

問6 客の筆者に向かって店主は「さあ、この中から好きなのを選び」とても言ったはずです。

問7 「有無を言わせない、威厳に満ちた口ぶり」、「店主は首を振り、『エイト』を繰り返す。きつと何十年も客の手ばかりを見てきたにちがいない店主が、そこまで言うのなら間違いなさろう」、「エイト、と同じクチョウで、そう断言しているような気がした」などから、客の手に合う手袋のサイズに関しては店主には長年の経験から絶対の自信があるようです。

三 詩は、今もって人々の記憶に鮮明な昨年（平成23年）3月2日の東北の大地震ではなく、「阪神淡路大震災を題材にしたものです。」早朝のことでした。

問1 「大きく揺れて すぐ止まって／また大きく揺れたんだよね／家が壊れるかと思った」大きな地震に見舞われ、学校は壊れなかったらうか、今日、学校（授業）あるのだから、と心配しているのでしょうか。

問2 トランポリンで跳ねるみたいに、地震で家ごと自分の体も跳ねたということですか。

問3 「やっと自分から話した」のが、さらに時日が経過してからですから、「うれしそうに」「きっぱりと」「すらすらと」などということはありません。また、「おとうさんが抱いてくれたから／こわくなかったけど」とあるので「さびしそうに」も不適當。ぼそっと、ぼつりともりましたのです。

問4 「あらためてふりかえつ」たのではなく、ようやく、そして、やっと「こわかったものすごくこわかった」あのときの気持ちを口に出すことができるようになったのです。

問5 自分の心の傷は、だれかが癒してくれるわけではありません。いや、治すことはできません。自分で治す以外にないということです。

問6 設問で、第5連までは、各連の始めと終わりは共通した表現になっている。と言っているのですから、ほとんど間違いようはないでしょう。会話文で始まり、時を示す言葉で終わっていますね。